

青森の民俗資料や文献資史料など 文化資源の発見と活用に関する「青森モデル」の構築と展開

山田 巖子¹渡辺 麻里子¹荷見守義¹・武井紀子¹・中村武司¹・南 修平¹亀谷 学¹・尾崎名津子¹・原 克昭¹・関根達人¹片岡太郎¹・植木久行²・竹村俊哉³・瀧本壽史⁴福井敏隆⁵・松井 太⁶・木村純二⁷・川瀬 卓⁸北原かな子⁹・木村隆博¹⁰・竹内勇造¹¹・庄司輝昭¹²多田健司¹³・小山隆秀¹⁴・石山晃子¹⁵・古川 実¹⁴長尾正義¹⁶・小林 力¹⁷・山崎杏由¹⁸・中田書矢¹⁹伊東 信²⁰・藤林美帆²¹

はじめに

本事業は、青森県内に豊富に存在する民俗資料や文献資史料などの文化資源を調査し、内容を研究分析し、その活用を通じて、地域に貢献することを目指している。この取り組みは、2014年4月の地域未来創生センター設立以来、6年にわたって継続してきたが、この間、地域の理解と協力を得ながら徐々に大きく発展させてきた。人文社会科学部内の分野を超えた教員の共同研究を軸として、学内や学外の研究者や地域の関係諸機関、外部の関係諸機関と連携し、研究をより複合発展的、かつ広域的に発展させることを目指している。

1. 背景と目的

青森県内には、民俗資料や文献資史料が豊富に遺されている。まだ十分な調査がなされずにいるこれらの資料を調査研究し、その意義を解明すると同時に、この地域の文化資源として活用し、地域の発展に寄与したいと模索してきた。また調査研究を発展させると同時に、弘前大学が基幹となり、様々な機関や外部組織と連携を取ることによって、活動をより発展させるよう努力してきた。これまで、2016年4月に東奥義塾高校、2017年3月30日に弘前市教育委員会、2018年3月29日には名古屋大学人文学研究科との間で学術研究協力協定を締結してきた。今後も、弘前大学が核となって、様々な研究機関や組織間の連携を強化し、文化資源調査を活動の中核とした地域創生活動を「青森モデル」として形成し、提唱していきたいと考えている。

文化資源を、研究者が活用するだけでなく、広く地域の文化資源としていくためには、地域住民にもよく知ってもらい、深く関わってもらうことが肝要である。地域住民と研究者が連携を強化し、研究成果

¹ 弘前大学人文社会科学部 ² 弘前大学名誉教授・弘前大学人文社会科学部客員研究員 ³ 弘前大学人文社会科学部客員研究員

⁴ 弘前大学教職大学院 ⁵ 弘前大学非常勤講師 ⁶ 大阪大学 ⁷ 東北学院大学 ⁸ 白百合女子大学 ⁹ 青森中央学院大学 ¹⁰ 東奥義塾高校教頭

¹¹ 弘前市立図書館 ¹² 弘前市教育委員会生涯学習課図書館・郷土文学館運営推進室長 ¹³ 弘前市中央公民館 ¹⁴ 青森県立郷土館

¹⁵ 北のまほろば歴史館副館長 ¹⁶ 三沢市教育委員会 ¹⁷ 八戸市教育委員会 ¹⁸ 野辺地町教育委員会 ¹⁹ 鯉ヶ沢町教育委員会

²⁰ 深浦町役場教育委員会 ²¹ 青森県立木造高校深浦校舎教諭

を共有し、住民の地域文化への理解を深めていくことが重要なのである。そのための情報公開を積極的に行い、県民向けの講座やセミナーの開講、古典籍やくずし字を学ぶ講座を開講するなど、県民が地域の文化資源について専門的知識を学べる機会を設け、地域住民が調査に参加できる環境を整えることが重要である。こうした県内の文化資源に関する「学び」を組織的かつ広域的に展開する地域ネットワークを構築し、本プロジェクトを契機として人文社会科学部および地域未来創生センターが青森の拠点となる組織作りを行い、地域との連携を強化していく。地域住民と協働する文化資源調査を核とした「青森モデル」を発展させ、全国に発信していくことを本事業の目的とする。

2. 実施内容とその成果

この一年間の取り組みについて、大きく、民俗資料調査と文献資料調査の2つの部門に分けて、報告する。

【1】民俗資料調査

まず、「民俗資料調査」の取り組みについて、以下、具体的に実施内容とその成果を報告する。

(1) 野辺地町祭礼調査

昨年度は野辺地町教育委員会の寄託事業として野辺地町の祭礼調査を実施したが、本年度は、フォーラムの開催などを計画したため、本センターの事業と連動して調査を行うこととした。

7月24日から8月20日にかけて、祭典部ごとに山車制作の様子や囃子の練習風景などを個別に調査した。8月22日の宵宮、23日から25日の本祭を合同調査した。それと並行して野辺地町馬門の熊野神社の祭り、12月31日の門打ちの準備、1月2日の権現様の門打ちなどを個別に調査した。

2019年8月3日の『東奥日報』（朝刊）では、7月24日の調査について「祇園まつり 歴史ひもとく 弘大が本年度調査 第一弾軒花づくり」の見出しで、浜町祭典部の軒花（祭礼中家の軒下を飾る花形の飾り）作りに参加して調査したときの様子が報じられた。8月10日のオープンキャンパスでは、これらの取り組みを「民俗学実習を（追）体験してみよう」で発表した（写真1 オープンキャンパス）。また、調査報告会を兼ねた「県内山車行事フォーラム」は2020年3月7日（土）に野辺地中央公民館で開催予定である。また報告書『野辺地町の祭礼と民俗』は3月末刊行予定である。

(2) 小川原湖民俗博物館旧蔵資料調査

2017年に科学研究費助成事業基盤研究（C）「地方における『民俗』思想の浸透と具現化—渋沢敬三影響下の民間博物館—」（研究代表 山田 巖子）が採択されたため、科研費の調査と連動して調査を実施した。

9月上旬に八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館、青森県立郷土館に寄贈された民具の数量や保管状況、活用状況を確認した。

10月13日に開催予定であった日本民俗学会第71回年会（於：筑波大学春日キャンパス）においてグループ発表「地方民間博物館とその時代」（研究代表 山田巖子）をエントリーしていたが、前日と当日の記録的な豪雨による交通機関の麻痺で登壇がかなわなかった。

日本民俗学会第71回年会実行委員会編『日本民俗学会第71回年会 茨城 研究発表要旨集』（2019年10月12日刊）には、以下の予稿が収録されている。

山田巖子「渋沢敬三のネットワークと小川原湖民俗博物館」（78頁）、小池淳一（国立歴史民俗博物館）「中道等の民俗学と博物館」（79頁）、丸山泰明（天理大学）「博物館史における小川原湖民俗博物館の特徴」（80頁）、小島孝夫（成城大学）「民間博物館における民俗資料継承の課題—世代間の民俗資料の捉え方の差異をめぐって—」（81頁）。なお、コメンテーターは仁平政人東北大学准教授を予定していた。この時の発表予定であった内容については、3月末刊行の報告書に原稿として掲載

予定である。

なお、科研の研究分担者の小池淳一氏は12月8日(日)に青森県民俗の会例会(於:青森県立博物館)において「青森地域の民俗研究史における中道等の位置」と題する発表を行った。またもう1人の分担者の仁平政人氏は、旧蔵資料のうち、古牧温泉のカッパ村の村長をしていた中河与一について『新しいかっぱ』をつくる—中河与一における『かっぱ村』とロマンティズム—と題する論文を青森県郷土作家研究会編『郷土作家研究』第39号(2019年10月 27-37頁)に発表した。

8月10日のオープンキャンパスでは「小川原湖民俗博物館旧蔵資料展」として小川原湖民俗博物館の旧蔵資料のうち、映像資料と、十和田科学博物館関連資料、古牧温泉で開催されていた青森県郷土芸能大会関連の写真などを展示した。併せて弘前大学の学生が行ってきた取り組みを、写真を中心とした資料で公開した。

(3) 津軽地方の鬼信仰に関する調査

津軽地方での鬼信仰の調査の成果を報告書などで発信してきたが、韓国の鬼的な存在であるトッケビの伝説を持つ全羅南道谷城郡ソンジガンキチャマウル(蟾津江汽車村)から招待を受け、2019年10月26日に、韓国全羅南道谷城郡、韓国文化財庁、社団法人ソンジガントッケビマウル、全羅南道民俗学会、谷城複合文化遺産保存会共催「韓国・中国・日本 トッケビ(鬼)イメージからのアプローチ 国際学術研究集会」(於:全羅南道ソンジガンマウル公会堂)で講演を行った(写真2 国際学術研究集会)。中国の鬼、韓国のトッケビと日本の津軽地方の「鬼」の表象について、日本、中国、韓国の研究者がそれぞれの特徴を講演し、他の講演者とともに参加者からの質疑に答えた。ソンジガンキチャマウルのトッケビは、急流の川に中州を作ったと言われ(写真3 トッケビの資料館)、弘前市鬼沢の、一晩で堰を作った鬼の話を聞いた聴衆は「(津軽地方の鬼に)親しみを感じた」と語った。

講演の内容は予稿集に、山田巖子「日本の東北地方の鬼と山人」(195-206頁 付:中国語訳、ハンダグ語訳)韓国・谷城複合文化遺産保存会編『韓国・中国・日本 トッケビ(鬼)イメージからのアプローチ 国際学術研究集会』(2019年10月)として掲載されている。韓国でも、民俗文化財の活用について関心が高まっており、「伝説」を持つ地域同士の交流もあるという。民俗文化財が、国を超えて市民レベルで関心を集めていることを実感する機会となった。



(写真1) オープンキャンパス



(写真2) 国際学術研究集会



(写真3) トッケビの資料館

【2】文献資料調査

(1) 弘前藩藩校「稽古館」資料および「奥文庫」関係資料の調査研究

東奥東奥義塾高校を中心に、弘前藩藩校「稽古館」および津軽家旧蔵資料の調査を行い、内容や意義を分析する。調査は、2019年4月～12月にかけて、約20回程度実施した。その成果は、2019年度弘前藩藩校資料調査報告会(後述)で市民に広く披露した。また、報告書にまとめ、2020年3月に、『東奥義塾高等学校所蔵 旧弘前藩古典籍調査集録』第6集として刊行するよう、現在、準備を進めている。

(2) 深浦円覚寺古典籍資料の調査研究

深浦町に所在する円覚寺所蔵の古典籍調査を実施し、その内容や意義を分析した。2019年度は、4月～12月まで9回の調査を実施し、今後1月～3月に3回実施する予定である。

京都・奈良の大寺院と関係し、都との知のネットワークを想像させる資料群や、津軽一円の寺院と関わり、津軽の寺院の知のネットワークを解明する資料群、修験道世界を解明する貴重な資料群などの調査が深められ、その資料価値が明らかになってきた。そのため今後は、文化財指定も目指して調査を進めていくこととした。

京都の醍醐寺に関わる資料があることから、10月10日～15日にかけて、醍醐寺聖教調査団との合同調査も実施した。醍醐寺資料を撮影している京都の業者にも来ていただき、写真撮影も行った。

また市民と協働した、市民調査団の活動も進めていった。今後、より多くの町民が参加するよう、工夫していきたいと考えている。

(3) 深浦円覚寺古典籍資料調査成果報告会の実施

2019年7月13日(土)深浦円覚寺古典籍資料調査成果報告会を、弘前大学コラボ弘大八甲田ホールにて開催した。弘前市民の関心も高く、当日は、160名を超える来場者にお越しいただいた。円覚寺の貴重資料の展示も行い、来場者の方々に実際に見ていただくことができた。詳しくは、後掲の開催事業報告を御覧いただきたい。

(4) 国際公開講座の実施

2019年11月3日(文化の日)に、弘前大学人文社会科学部 国際公開講座2019「日本を知り、世界を知る」を実施した。今年のテーマは「人文学で／人文学を探究する」で、4名の人文社会科学部教員の講演と、台湾から外国人研究者を招聘して、特別講演を行った。133名もの市民の方にご来場いただき、盛会となった。詳しくは、後述の開催事業報告に記したのでご参照いただきたい。

(5) 旧弘前藩藩校「稽古館」資料調査報告会の実施

本年度の東奥義塾図書館所蔵和古書調査の成果を中心に、藩校資料調査報告会を実施した。本報告会は2014年度から数えて今年で6年目となり、当日は昨年度を上回る93名の来場者があった。

本年度報告会は、2019年11月17日(日)13:00～16:30、弘前市立観光館1階 多目的ホールにおいて実施した。人文社会科学部今井正浩学部長による開会の辞につづき、東奥義塾高等学校塾長コルドウェル ジョン先生よりご挨拶を賜った。

本年度は、第一部特別講演として、講師に東京学芸大学名誉教授の大石学先生を迎え、「幕末の『教育力』一画一化と個性化と一」と題し、自身が時代考証の監修として関わられた大河ドラマの事例を挙げつつ、幕末当時の教育が時代を動かす原動力としてどのように作用したのか、という観点から、稽古館資料が用いられ学ばれた時代的背景について講演いただいた。

第二部・第三部では、弘前大学人文社会科学部の藩校資料調査プロジェクトメンバー6名が今年度の調査成果を報告した。各教員の報告については、以下の通りである。

- ・徐光啓撰『農政全書』とその周辺

人文社会科学部教授 荷見 守義

- ・東奥義塾高校図書館所蔵奥文庫関係資料について—上杉鷹山『南亭余韻』他—

人文社会科学部教授 渡辺麻里子

- ・清の康熙帝勅撰『佩文韻府』と『淵鑑類函』

弘前大学名誉教授・人文社会科学部客員研究員 植木 久行

・『泰西修身論』とフランシス・ウェイランドの諸影響

人文社会科学部准教授 南 修平

・東奥義塾高校図書館蔵日本思想史関係資料について

—《秘事相伝書》の世界～津軽信政と山鹿素行・吉川惟足をつなぐモノー

人文社会科学部准教授 原 克昭

・『大日本史』と『礼儀類典』の編纂—（付）2019年度藩校資料調査概要—

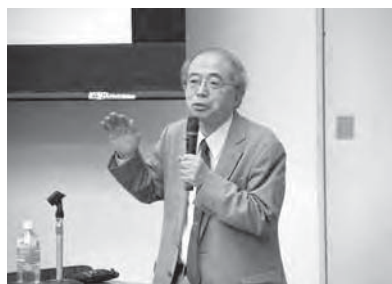
人文社会科学部准教授 武井 紀子

各報告については、『東奥義塾高等学校所蔵 旧弘前藩古典籍調査集録』第六集（2020年3月刊行予定）を参照されたい。

これらの講演・報告を受け、弘前大学教育学部教授の瀧本壽史氏より講演および報告の内容を振り返り、歴史的な流れの中で弘前藩校のあり方・変遷についても考えることが重要であるとのコメントがなされた。最後に、人文社会科学部地域未来創生センターの渡辺麻里子副センター長による閉会の辞をもって報告会は終了した。

本年度の報告会には、弘前市内だけではなく、近隣の青森市や黒石市をはじめとする県内、県外では大館市からの来場者があった。来場者アンケートでは、「教育という観点から歴史をみたことがなかなかなかったので、大石先生のご講演を大変興味深く聞かせて頂きました。（20代女性）、「あまりに各テーマが駆け足であったため、講義の先生、聴講者共、消化不良さみではないかと思いました。この内容であれば、一日のスケジュールで実施して欲しいかったです。」（50代女性）、「Q & Aの時間を設定すれば、もう少し生きてくると思いました」（60代男性）、「毎年参加しておりますが、年毎に内容の高度な展開となっていて、すばらしい報告会となっていると思いました。これからも地域民間人への窓口としての勉強させていただく場所の弘前大学としてあるようお願い致します」（60代女性）などのご意見・ご要望を頂戴した。

本年度は例年の開催時期・場所を移しての試みとなった。毎年参加者が次第に増え、地域における本プロジェクトの浸透を実感する一方、特に若い世代へのプロジェクトの周知および文化財や地域資料に対する関心の惹起が今後の課題となってくると感じた。また、近世弘前藩全体の中での稽古館資料の位置づけなど、今後の活動における課題も見えてきた。本報告会は、本プロジェクトの調査成果をより有意義に活かすための示唆を多く得ることができた貴重な会となった。（武井 紀子）



（5）くずし字講座の実施

文献資料調査を進める一方で、文献資料に興味を持つ人を増やすため、また文献資料調査への理解を深めるため、くずし字講座を行っている。本年度、子供対象から大人向けまで、様々な講座を行ったので、ここに報告する。

①小学校でのくずし字講座

今年も弘前市中央公民館からの要請を受けて、弘前大学が所在する第三学区内の小学校でのくずし

字講座を実施した。この講座は、すでに7年目となっている。人文社会科学部教授渡辺麻里子が講師を務め、ゼミ学生がアシスタント講師として、くずし字のクイズを行ったり、江戸時代に版行された渋川版の『浦島太郎』を読み聞かせるなど、様々な工夫を凝らして授業をしている。

小学校のくずし字講座は、以下のような日程で行った。

- (1) 弘前市立三大小学校 2019年7月1日(月)(於)各教室
10:30～11:15 6年1組
11:25～12:10 6年2組
- (2) 弘前市立大成小学校 2019年7月8日(月)(於)多目的ホール
9:25～10:10 6年1組・2組合同
- (3) 弘前市立文京小学校 2019年12月6日(於)体育館
10:30～11:15 6年1組・2組合同

内容は、はじめに、渡辺が講義でくずし字のあらましを教える。くずし字とは何かから始め、漢字がくずれてひらがなができあがる過程を説明し、くずし字の構造やくず方の原則を理解させる。その上で、グループを作り、グループ対抗のクイズを行うことにより、漢字からひらがなに変化する実例を学び、理解を深める。クイズは全部で4題。大いに盛り上がる。

続けて、現在にないひらがなも多く使われていることを説明し、江戸時代に広く読まれていた、渋川版『浦島太郎』の版本(影印)を見る。何文字か、今とは異なる文字を確認する。

最後に、ゼミ生による読み聞かせを行う。その折も、ただ一方的に説明せず、担当者は必ず子供たちに問いかけ、やりとりをするような工夫をして進める。江戸時代の「浦島太郎」は、現在、昔話でよく読まれているストーリーとかなり異なるので、そうした違いも、学生と子供たちのやりとりから、子供たちに気づき、発見してもらおう。最後に、日本古典文学を学ぶ意義を話し、今後楽しく国語や古典文学を勉強するように呼びかけて講義を終えた。

「くずし字講座」というと、大人でも難しそうに感じると思うが、この小学校用くずし字講座は今年で7年目となり、小学生でも楽しく学べるプログラムを作っている。また、教室でも体育館のような大きな場でも対応できるようにしている。(教室のような小規模のスペースの方が、理解しやすいようであるが。)

小学生が書いてくれた感想を少し紹介しておきたい。

- ・まず最初にくずし字をならいました。いろんな漢字をくずしてひらがなが出てきたのすごかったです。・くずし字をしれてよかったです。書いてみたいです。
- ・昔の人は、字を書くとき、つなげて書いていたのがすごかったです。
- ・最初はなんて読むのかわからなかったけど、どんどん説明を聞いているとわかってきて、自分のくずし字を書いてみたいと思いました。
- ・今日はくずし字について学びました。書き方のコツなどがしれてよかったです。
- ・くずし字の「三か条」をしれてよかったです。「昔の人はとても頭がいいんだな」と思いました。
- ・浦島太郎の話は、今と昔では全然違うストーリーで面白かったです。
- ・浦島太郎の違う物語は、とても今の浦島太郎と全く違うのでびっくりしました。
- ・新しく知ったことは、うら島太郎がかめをつったことと、うら島太郎がつるになったことです。
- ・ほかの物語のお話も聞いてみたいと思いました。また授業してほしいです。

以上のように、とても楽しんで授業を受けた様子がかえり、また感想を書いた用紙には、自分の名前をくずし字で書いている児童が多くいた。小学生がくずし字をすぐに自分の物にして、活用しはじめる応用力に感心した。



②中学校でのくずし字講座

学区内の6年生全てがくずし字講座を受講し、上記の3校が合わさる中学校が、第三中学校である。弘前市立中央公民館から、学習の継続・発展という要請を受けて、第三中学校でもくずし字講座を行っている。三年目になる今年は、昨年の授業の後、受講した中学生の感想に「くずし字を書きたい」と多く寄せられたことから、今年は「読んでみる」だけでなく、「書いてみる」に挑戦する授業カリキュラムを作成した。また中央公民館は、生徒の数に足りるだけの筆ペンを用意してくださった。

第三中学校では、12月2日（月）に、1年1～3組、9日（月）に、1年4～5組と、2週間で5クラスを順番に回って授業を行った。小学校の時と同様に、渡辺が講師を務め、ゼミの学生（大学生）がアシスタント講師を務めた。授業担当の中学校の先生には、進行を補助していただいた。

授業の最初に、ひらがなのくずし字について概説し、小学校の時の復習をしつつ、実際に、手許に配った用紙に、どんどん書いてもらった。ひらがなのくずし字の構造を理解したところで、自分の名前を、変体仮名で書くことに挑戦した。時間の関係で、自分の名前全文字ではなく、一字ないし二文字を書いてもらった。

続いて、グループに分かれて、くずし字を読んでみることに挑戦した。生徒には授業で学習したばかりの『竹取物語』の絵巻（くずし字体）を配付し、グループごとに指定した文字についてもとの漢字（字母）を探してもらった。グループで取り組んだ結果、スムーズに進めることができた。黒板に貼りだして花丸を付けると、生徒たちは誇らしそうであった。くずし字体の『竹取物語』の冒頭をクラス全員で音読し、くずし字の学習を結んだ。

最後に、古典文学への誘いとして、ゼミの学生たちが、『竹取物語』の様々なバージョンについて、説明を行った。卵からかえるかぐや姫の話や、蒔絵の箱に入れて育てられる絵巻の絵の解説に、中学生はとても興味を持った様子であった。

授業後に書いてもらった中学生の感想を以下に記す。

- ・習字の行書とは少し違って、楽しかったです。
- ・昔の人は、今一文字のひらがなでも、様々な字をくずしたのを作っていたことを知りました。
- ・漢字をくずすのにも昔の人は工夫したりして、すごく頭がいいんだなと思いました。
- ・実際にくずし字を書いてみよう！というのでは、けっこう難しかったけれど、最後にはけっこうまく書けるようになりました。
- ・先生のくずし字の書き方が、すらすらと書いていて、僕もすらすら書けるようになりたいなと思いました。
- ・私が心に残ったことは、グループ活動です。一人ではできなかったことが、みんなで力を合わせてできた時にすごく嬉しかったです。
- ・筆ペンで書く活動の時、近くの大学生の人たちが、「上手だね」とか「こんな感じにしたらもっと良いよ」などと教えて下さり、楽しく授業を受けることができました。
- ・今日は、漢字をなめらかにしてくずしてひらがなにする活動をしました。一筆書きのようにつなげ

て簡単にするやり方はとてもわかりやすかったです。

- ・竹取物語が今の時代とは違う話だった時代があったことなど、初めて知った知識がたくさんあって、興味を持ちました。

書いてみる、読んでみるは、時間が短くペースが速かったこともあり、少し難しく感じた生徒もいたようだが、今とは異なる世界に興味を持った生徒もいた。最後に、生徒たちに国語の勉強を楽しんでくださいとよびかけて、授業を結んだ。古典文学へのアプローチは色々あるので、この講座が一つの楽しい体験になることを願う。中学校のくずし字講座は、RAB テレビも取材に入り、ニュースで報道された。



③オープンキャンパスでのくずし字ブース開設

2019年8月10日、弘前大学のオープンキャンパスが行われた。日本古典文学ゼミでは、総合教育棟3階318の教室を使用して、くずし字ブースを開設し、くずし字のクイズコーナーや、くずし字のミニ講座を実施した。10:00～15:00の間、約350名の高校生が訪れ、ゼミ生が趣向を凝らしたクイズに挑戦していた。また全問正解した来場者には、ゼミ生が手作りした鳥獣戯画のしおりをプレゼントした。クイズに困っている高校生には、大学生がアドバイスし、一緒に解くことを通じて、くずし字の世界を体験してもらっていた。



④弘前市立図書館でのくずし字講座

今年度は、弘前市立図書館と弘前大学人文社会科学部の連携協定を活かし、弘前市立図書館において、市民向けのくずし字講座を実施した。

- (1) 11月4日(月曜日・振替休日) 10:00～12:00
- (2) 11月17日(日) 10:00～12:00
- (3) 11月24日(日) 10:00～12:00

くずし字講座は以上の3回連続で行った。図書館の作成したチラシでは、全くの初心者向けということで募ったが、受講生は、8名で、初めて学ぶ人から、少し学んでいる人など、色々な方が来ていた。11月24日は、RABテレビの取材が入り、受講生は感想を楽しそうに話していた。

初回の4日の時には、くずし字を学ぶだけではなく、弘前市立図書館が所蔵する古典籍を運び出し、受講生には「扱い方」をレクチャーした上で、実際に触ってもらった。また、24日には、図書館が取り組んでいるデジタルアーカイブ事業も紹介し、古典籍がパソコンの上で見られることを具体

的に伝えた。

受講生のアンケートから感想を紹介すると以下の通りである。

- ・時間が足りなかった。この続きをまたお願いしたい。
- ・次の講座にも参加したい。
- ・教えてくださった先生もわかりやすいように説明していた。
- ・くずし字を身近に感じられた。
- ・今回の講義をスタートにして、より難解なものも自由に読み書きできるように学習したい。
- ・字のなりたちが面白いし、講座も続きがあれば良いと思います。

アンケートを読むと受講生の皆さんは、楽しく学んだ様子である。大人でも、楽しく学ぶことは大事である。くずし字講座は、ともすると眉間にしわを寄せて学ぶイメージがあるが、実際にはそうではなく、読めた時の爽快感は、パズルを説く楽しみにも似ている。こうしてくずし字を学んだ人が和古書に興味を持ち、津軽の豊かな歴史文献資料に関心が向けられるようになることを期待している。



3. 事業の成果

本事業は、今年度は様々な場面で新聞やテレビで取り上げてもらった。一つ一つの活動が広がりを見せ、弘前や地域の皆さんに周知され、支援していただける雰囲気醸成されてきているように感じる。様々な広がりの中で、組織的な連結・展開も重要である。

①弘前大学人文社会科学部と名古屋大学大学院人文学研究科との学術協力の協定締結

2019年3月29日、弘前大学人文社会科学部と、名古屋大学大学院人文学研究科との間で、学術交流の協定を締結した。今後、この協定を契機として、より一層関係を深めつつ、研究・教育への成果を上げていきたいと考えている。

早速、7月13日に開催した深浦古典籍保存調査プロジェクトの成果報告会では、名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター長の阿部泰郎先生をお招きし、地方の寺院資料の意義についてご講演をいただいた。

今後、益々、両者の関係を深め、研究成果を挙げていきたいと考えている。

②「公益財団法人みちのく・ふるさと貢献基金」の助成交付

表記基金に、藩校資料調査をテーマに応募したところ、申請した「弘前藩藩校「稽古館」旧蔵資料および弘前藩主旧蔵書「奥文庫」の調査研究による近世津軽における知の体系を解明する教育研究事業」を採択していただいた。2019年10月25日には、青森市にて贈呈式が行われ、交付助成を受けることができた。

貴重な資金の助成は大変ありがたく、しっかりと成果をあげられるようにこれまで以上に頑張りたいと思う。採択された事業は、弘前藩が作っていた学校「稽古館」が持っていた本や津軽のお殿様が持っていた本を調査研究するものである。調査は2014年にスタートし、以来、その成果を、毎年秋に「藩校資料

調査報告会」で市民に報告、また毎年3月に報告書を刊行して、調査成果を披露してきた。今回の交付金は、2019年3月に刊行する『東奥義塾高等学校所蔵 旧弘前藩古典籍調査集録』第6集の印刷費に充当する予定である。良い報告書が作成できるように、努力していきたい。

4. おわりに

青森・津軽は、歴史ある土地であり、多くの文献資料や民俗資料が遺されている。しかしそれは、その存在に気づかないでいると、急激なスピードで廃棄され、失われてしまう。津軽は実に多くの文献資料・民俗資料が遺されているが、多くの資料は、これまであまり研究されたことがなく、地域の人にも知られることがなく、静かに眠っている。私たちのこの事業は、こうした眠れる資料を発掘し、現在によみがえらせ、未来に向けてつなげることにある。

事業の目的は大きく3つある。

第1には、研究調査によって、貴重な文化資源を掘り起こし、歴史を解明すること。

第2には、市民にその成果を披露し、みなで研究成果を共有し、未来に向けて大切に保存し、また積極的に活用していくこと。時には保存調査活動と一緒に参加してもらい、理解を深めること。

第3には、小学校から高校生など、未来を担う子供たちへの情報提供と教育を実施し、地域の歴史や文化に理解を深め、地元の子供たちに郷土への理解と愛を深めること。大学生や市民の皆さんには一緒に研究に参加してもらい、世代を越えて、津軽の文化財への理解を深め、未来をになう若者を育てる教育活動を推進することである。

研究調査が進み、青森が「歴史文化都市」として日本にそして世界に広く認知されるようになることを願う。

今後とも、私どもは努力を続けて行きたい。皆様の暖かいご声援とご協力をお願い申し上げます。



弘前大学人文社会科学部(今井正徳学部長)と名大大学院(今井正徳学部長)とが、弘前大学と名大大学院の学術交流協定を締結した。研究分野の交流、歴史文化遺産を基盤とした共同研究の推進を図るとしている。

弘前大学人文社会科学部(今井正徳学部長)と名大大学院(今井正徳学部長)とが、弘前大学と名大大学院の学術交流協定を締結した。研究分野の交流、歴史文化遺産を基盤とした共同研究の推進を図るとしている。

弘前大学人文社会科学部(今井正徳学部長)と名大大学院(今井正徳学部長)とが、弘前大学と名大大学院の学術交流協定を締結した。研究分野の交流、歴史文化遺産を基盤とした共同研究の推進を図るとしている。

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。転載は固くお断りします。



弘前大学人文社会科学部(今井正徳学部長)と名大大学院(今井正徳学部長)とが、弘前大学と名大大学院の学術交流協定を締結した。研究分野の交流、歴史文化遺産を基盤とした共同研究の推進を図るとしている。

弘前大学人文社会科学部(今井正徳学部長)と名大大学院(今井正徳学部長)とが、弘前大学と名大大学院の学術交流協定を締結した。研究分野の交流、歴史文化遺産を基盤とした共同研究の推進を図るとしている。

弘前大学人文社会科学部(今井正徳学部長)と名大大学院(今井正徳学部長)とが、弘前大学と名大大学院の学術交流協定を締結した。研究分野の交流、歴史文化遺産を基盤とした共同研究の推進を図るとしている。

この画像は当該ページに限って陸奥新報社が利用を許諾したものです。転載は固くお断りします。



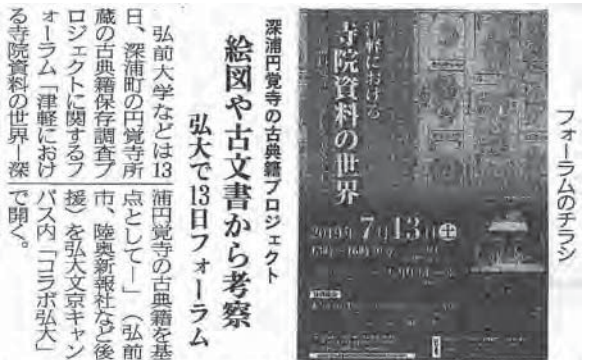
児童ら崩し字を解説

弘前市立第三小学校(高木隆雄校長)で、特別公開授業が行われた。児童らは崩し字の解説や平仮名の成り立ちについて理解を深めた。

弘前市立第三小学校(高木隆雄校長)で、特別公開授業が行われた。児童らは崩し字の解説や平仮名の成り立ちについて理解を深めた。

弘前市立第三小学校(高木隆雄校長)で、特別公開授業が行われた。児童らは崩し字の解説や平仮名の成り立ちについて理解を深めた。

この画像は当該ページに限って陸奥新報社が利用を許諾したものです。転載は固くお断りします。



寺院資料の世界

2019年7月13日(土)

深浦円覚寺の古典籍プロジェクト

弘大で13日フォーラム

深浦円覚寺の古典籍プロジェクト

弘大で13日フォーラム

深浦円覚寺の古典籍プロジェクト

弘大で13日フォーラム

この画像は当該ページに限って陸奥新報社が利用を許諾したものです。転載は固くお断りします。

青森の民俗資料や文献史料など文化資源の発見と活用に関する「青森モデル」の構築と展開

二〇一九年度

旧弘前藩藩校稽古館 資料調査報告会

2019年

11月17日

13:30~17:00(予定) 開場 13:00
弘前市立観光館1階 多目的ホール
(青森県弘前市下白銀町2-1 0172-37-5501)

来聴歓迎 定員100名
事前申込不要・入場無料

弘前藩の藩校「稽古館」が所蔵していた古典籍資料は、現在、東奥義塾高校や弘前市立弘前図書館に保存されています。これらは江戸時代の津軽地域における人々の「知の体系」を解き明かすための貴重な文化遺産です。弘前大学では、2014年から調査研究を行い、毎年成果発表会を開催してきました。今年も、今年度調査における最新の成果を、各専門分野の教員がそれぞれの立場から報告いたします。また、今年は、日本近世史がご専門である大石学先生に、幕末の「教育力」について、大河ドラマなどを例にわかりやすく講演いただきます。

津軽の歴史・文化に関心をお持ちの方はどなたでも自由にご参加ください。一人でも多くの方のご来場をお待ちしております。

■プログラム

13:30 開会 開会の辞 弘前大学人文社会科学部 学部長 今井 正浩
ご挨拶 東奥義塾高等学校 塾長 コルドウェル ジョン

第一部

13:45 特別講演
幕末の『教育力』 — 画一化と個性化と —
講師 東京学芸大学 名誉教授
大石 学 先生

第二部・第三部

14:55 研究報告 今年度の調査の成果を、各専門分野の立場から弘前大学教員が報告します。

16:40 コメント 弘前大学教職大学院 教授 瀧本 壽史

16:55 閉会 閉会の辞 弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター 副センター長 渡辺 麻里子

■主催 弘前大学人文社会科学部
弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター

■共催 東奥義塾高等学校

■後援 弘前市 青森県教育委員会 東奥日報社 陸奥新報社
NHK青森放送局 RAB青森放送 ATV青森テレビ ABA青森朝日放送

【科研費】 ※本研究発表会は、科研基盤(C)「弘前藩藩校「稽古館」旧蔵本の悉皆調査による近世津軽における知識集積の解明」の研究成果による(代表：楠木久行)
平成31年度大学コンソーシアム学都ひろさき活性化支援事業費補助金対象事業

【お問い合わせ】 弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター(古川・武井)

住所:〒036-8560 弘前市文京町1番地 電話:0172-39-3198(直) 平日10:15~17:00 メール:irrc@hirosaki-u.ac.jp
弘前藩藩校資料調査研究会ウェブサイト: <http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/hankou/> 弘前藩藩校資料調査研究会 検索

地域未来創生センター 弘前大学人文社会科学部 弘前藩藩校資料調査研究会

II-5

青森の民俗資料や文献資料など
文化資源の発見と活用に関する「青森モデル」の構築と展開

タイムスケジュール

- 13:30 開会 開会の辞 弘前大学人文社会科学部 学部長 今井 正浩
ご挨拶 東奥義塾高等学校 塾長 コルドウェル ジョン
- 13:45 第一部 特別講演 (60分)
幕末の『教育力』— 画一化と個性化と —
東京学芸大学 名誉教授 大石 学 先生
- 14:45~14:55 休憩(10分)
- 14:55 第二部 研究報告① (45分) 荷見 守義 / 渡辺 麻里子 / 植木 久行
- 15:40~15:50 休憩(10分)
- 15:50 第三部 研究報告② (45分) 南 修平 / 原 克昭 / 武井 紀子
- 16:40 コメント 弘前大学教職大学院 教授 瀧本 壽史
- 16:55 閉会 閉会の辞 弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター
副センター長 渡辺 麻里子

第一部 基調講演 講師紹介



おおいし まなぶ
大石 学 先生 東京学芸大学 名誉教授
独立行政法人日本芸術文化振興会 監事

1953年、東京都生まれ。ご専門は、日本近世史。東京学芸大学卒業、同大学院修士課程修了、筑波大学大学院博士課程満期退学。代表的なご業績に、『享保改革の地域政策』（吉川弘文館、1996年）、『江戸の教育力 近代日本の知的基盤』（東京学芸大学出版会、2007年）『徳川吉宗・国家再建に挑んだ将軍』（教育出版（江戸東京ライブラリー）2001年）、『大岡忠相』（吉川弘文館（人物叢書）2006年）など多数ありますが、中でも、『近世藩制・藩校大事典』（吉川弘文館、2006年）は、藩制・藩校を学ぶ者にとっての必須の事典です。江戸文化を伝えるご業績も多く、NHK大河ドラマ（『新選組!』『篤姫』『龍馬伝』『八重の桜』『花燃ゆ』）等の時代考証を担当、2009年には時代考証学会を設立し、以来、同会会長をなさっています。今回のご講演では、弘前藩の教育を含む「江戸教育力」の到達点である幕末の「教育力」について、大河ドラマなどを例にわかりやすくお話いただきます。

第二部 研究報告 題目・発表者

■徐光啓撰『農政全書』とその周辺

弘前大学人文社会科学部 教授(中国史) 荷見 守義

■東奥義塾高校図書館所蔵奥文庫関係資料について —上杉鷹山『南亭余韻』他—

弘前大学人文社会科学部 教授(日本古典文学) 渡辺 麻里子

■清の康熙帝勅撰『佩文韻府』と『淵鑑類函』

弘前大学 名誉教授・人文社会科学部客員研究員(中国古典文学)
植木 久行

第三部 研究報告 題目・発表者

■『泰西修身論』とフランス・ウェーランドの諸影響

弘前大学人文社会科学部 准教授(アメリカ史) 南 修平

■東奥義塾高校図書館蔵日本思想史関係資料について

弘前大学人文社会科学部 准教授(日本思想史) 原 克昭

■『大日本史』と『礼儀類典』の編纂 —(付)2019年度藩校資料調査概要—

弘前大学人文社会科学部 准教授(日本古代史) 武井 紀子

コメント 弘前大学教職大学院 教授 瀧本 壽史